

彰 金沢大学

SHOU

往

OU

察

SATSU

来

RAI

金沢大学資料館

2009

20年目の角間キャンパスから城内を想う

1989

目次

ごあいさつ	2
1978(昭和53)年頃の城内キャンパス	3
金沢大学沿革図	5
城内キャンパス・角間キャンパス年表	6
I. 城内キャンパス今昔	7
II. 新制金沢大学発足～お城の中の総合大学	9
III. キャンパス移転～その歴史と背景	11
IV. 金大生の生活～授業・サークル・放課後	13
V. 再発見、金沢城の歴史	15
出品目録	17
協力者・主要参考文献	18

凡例

- 本図録は、金沢大学資料館が、平成21年10月15日から11月13日まで開催する特別展「彰往察来 -20年目の角間キャンパスから城内を想う-」の解説図録です。
- 出品目録と展覧会の列品順序はほぼ一致しますが、一部展示替えも行われます。
- 本展覧会は古畑徹、奥野麻理子、丸本由美子が担当し、今井育子が補助しました。
- テーマ解説・資料解説等は、古畑、奥野、丸本が執筆し、コラムは各執筆者が担当しました。
- 掲載図版の所蔵者は、資料解説・出品目録にそれぞれ明記してありますが、記名のないものは全て本館の所蔵品です。
- 図版資料は各所蔵者から提供を受けましたが、他は本館で撮影しました。

ごあいさつ

金沢大学は、今年で60年、ちょうど還暦になります。それとともに、角間キャンパスに移転してから20年の節目でもあり、それは資料館が開館してから20年ということでもあります。そこで、資料館としては、例年秋の特別展企画を、このダブルの記念イヤーにふさわしいものにしてしようと考えて検討をしてきました。その結果、60年前の創立時に、メインキャンパスとして初めて学生を受け入れた金沢城内のキャンパス（通称、城内キャンパス。正式には丸の内キャンパス）を、移転20年目を迎えた角間キャンパスから振り返るというコンセプトで、企画展示をすることとし、タイトルを「しょうおうさつらい彰往察来」とつけました。

「彰往察来」はあまり馴染みのない言葉ですので、少し解説が必要です。これは、中国の古典『易経』の繫辭下「夫易，彰往而察来」【訓読：そ えき おう あきら らい さつ夫れ易は、往を彰かにして来を察す】を出典とする四字熟語で、「過去の事柄を明らかにし、将来のことを考察する」という意味です。「温故知新」と同意と言ってよいでしょう。なぜ一般的な「温故知新」をタイトルにしなかったのかという疑問を持たれる方もおられると思いますが、それは単純に「温故知新」を過去に使ってしまっていたため、それ以上の他意はありません。要は、単に懐かしく振り返るだけでなく、そこから将来の大学のあり方も考えてみてもらえたら、という気持ちを込めてのタイトルです。

年表を見てもらえればわかりますが、角間移転開始後の20年は、大学にとって本当に激動の20年でした。キャンパスだけでなく、組織も、カリキュラムも、そして大学の雰囲気や教員・学生のあり方・気質も大きく変化しました。20年前、移転をめぐるごたごたがあったにしても、そこには学問の府としての「余裕」がありました。当時の「余裕」をすべて肯定することはできませんが、いまの追われるような雰囲気の大学よりは、学問にとって生産的な場だったことは間違いなかったような気がします。今回の特別展では、そんな城内時代の雰囲気や移転をめぐる人々の思いを、できるだけわかりやすく展示したつもりです。そんな中から、単なるノスタルジーではなく、いまと将来を考えるヒントを見つけてもらえれば幸いです。

なお、この特別展は、今年から始まる「金沢大学創基150年記念事業」の一環でもあります。金沢大学の濫觴は1862年の加賀藩種痘所の創設になります。それから150年目の記念の年が2012年ですので、それへ向けての記念事業が今年から始まりました。資料館はこれに協力し、これからの3年間、150年前へ向けてさかのぼるような形で秋の特別展を企画していくつもりです。来年度以降の本資料館の特別展にもご期待いただければと存じます。

金沢大学資料館長
古畑 徹

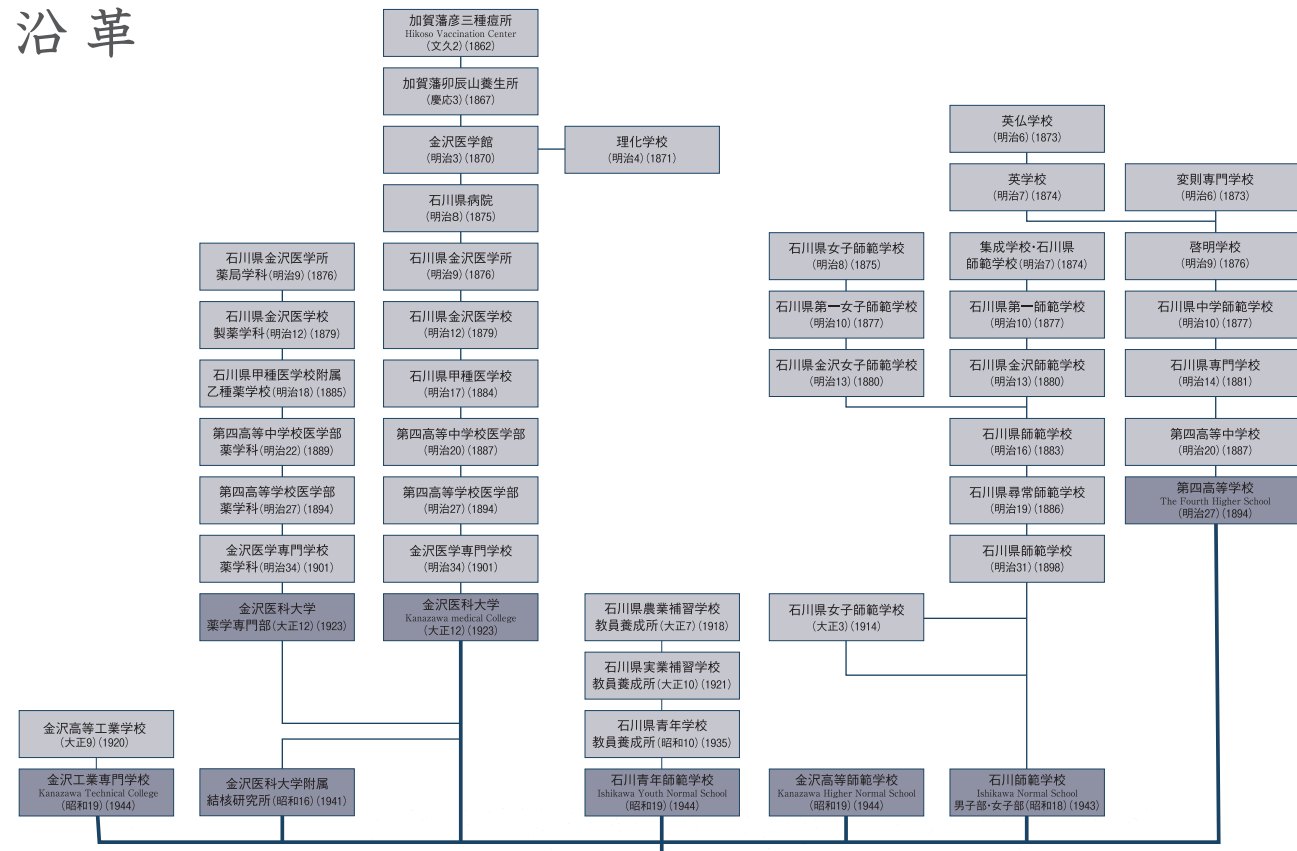
1978(昭和53)年頃の城内キャンパス



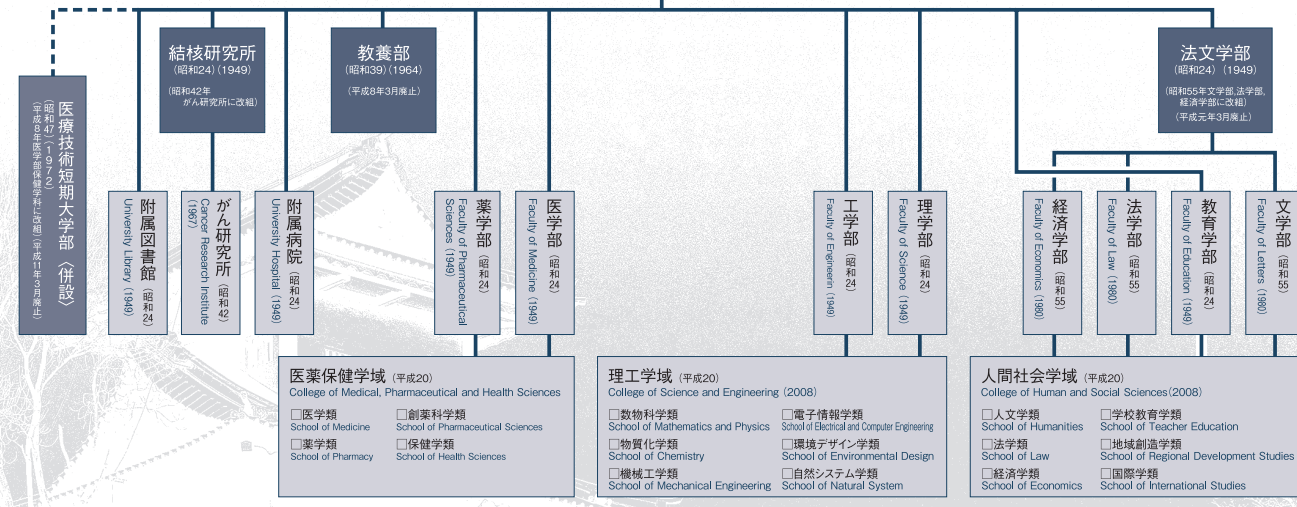
- 1 石川門
- 2 植物園
- 3 鶴丸倉庫
- 4 教育学部分館
- 5 教育学部第二教棟
- 6 教育学部校舎
- 7 部室
- 8 保健管理センター
- 9 本部庁舎
- 10 大体育館
- 11 城内グラウンド
- 12 小体育館
- 13 部室
- 14 トレーニングセンター
- 15 宮守坂口
- 16 三十間長屋
- 17 温室
- 18 図書館
- 19 法学部校舎
- 20 学生会館
- 21 学生会館別館
- 22 教養部校舎
- 23 理学部校舎
- 24 大手門
- 25 大学教育開放センター
- 26 甚右衛門坂
- 27 理学部実験研究棟
- 28 黒門

※建物の名称等の固有名詞は、昭和53年当時のものです。

沿革



金沢大学
(昭和24年5月)
Kanazawa University
(May, 1949)



金沢大学歴代学長一覧 Presidents of Kanazawa University

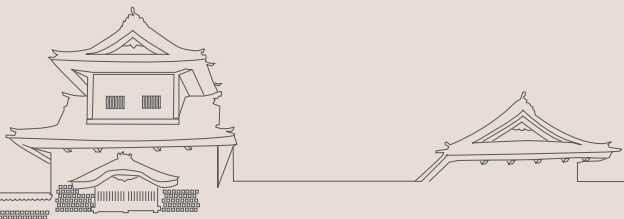
代	氏名	在任期間
初代	戸田 正三 TODA, Shozo	1949.9.22~1961.9.21
第2代	石橋 雅義 ISHIBASHI, Masayoshi	1961.9.22~1967.9.21
第3代	中川 善之助 NAKAGAWA, Zensuoku	1967.9.22~1973.9.21
第4代	豊田 文一 TOYOTA, Bun-ichi	1973.9.22~1979.9.21
第5代	金子 曾政 KANEKO, Katsumasa	1979.9.22~1985.9.21
第6代	本陣 良平 HONJIN, Ryohei	1985.9.22~1989.9.21
第7代	青野 茂行 AONO, Shigeoyuki	1989.9.22~1993.9.21
第8代	岡田 晃 OKADA, Akira	1993.9.22~1999.9.21
第9代	林 勇二郎 HAYASHI, Yujiro	1999.9.22~2008.3.31
第10代	中村 信一 NAKAMURA, Shin-ichi	2008.4.1~

※昭和24(1949)年以前の前身校沿革は主要なものを示した。
平成21(2009)年4月現在。

城内キャンパス・角間キャンパス年表

西暦	年号	金沢大学の出来事	年号	地域・日本・世界の動き
1945	昭和20	金沢城内の第九師団、武装解除。占領軍石川軍政隊、金沢城跡接收。(10月) 石川県知事、北陸総合大学の誘致を文部省に陳情、戦後における北陸総合大学誘致運動の始まり。(12月)	昭和20	ポツダム宣言受諾、日本無条件降伏。GHQによる占領開始。
1946	昭和21	北陸総合大学設置期成同盟会(のち北陸総合大学設立準備委員会)が発足。(6月)		
1947	昭和22	石川軍政隊が石川県知事に北陸総合大学設置を条件に金沢城跡を返還する旨の文書を交付。石川県知事、金沢城跡に総合大学設立の具体的な計画を発表。(12月)	昭和22	教育基本法、学校教育法公布。日本国憲法施行。大学基準協会創立。
1948	昭和23	北陸総合大学設立準備委員会、新設大学の名称を「金沢大学」と決定。「設置許可申請書」を正式に文部省に提出。(5月)	昭和23	大学設置委員会(新制大学設置の審査機関)を設置。新制国立大学実施方針を決定。
1949	昭和24	金沢大学発足。金沢城内に大学本部、法文学部、一般教養部、附属図書館が置かれる。(5月) 金沢大学開学。第1回入学式を挙行し、816名の入学を許可。(7月) 金沢大学1期生の授業開始、校舎は金沢城内の兵舎を改装して使用。(9月)	昭和24	国立学校設置法公布。新制国立大学を各都道府県に設置。
1950	昭和25	金沢城跡を金沢大学に移管。(3月)	昭和26	サンフランシスコ講和条約、日米安保条約調印。
1953	昭和28	教育学部、弥生町旧石川師範学校敷地(現、弥生小学校・泉中学校)より城内への移転完了(4月)	昭和27 昭和28	サンフランシスコ講和条約発効。GHQによる占領終了、独立回復。 内灘闘争終息。
1955	昭和30	医学研究科博士課程設置。(金沢大学初の大学院)(7月)		
1956	昭和31	ペンシルバニア大学(アメリカ合衆国)と大学間交流協定を締結。(金沢大学初の国際交流協定)(1月)		
1957	昭和32	金沢大学図書館書庫(金沢城三十間長屋)が重要文化財に指定。(6月)		
1958	昭和33	昭和天皇来学。医学部(宝町キャンパス)を視察。(10月)	昭和35	安保闘争。所得倍増計画を閣議決定。
1962	昭和37	金沢大学城内整備計画事業始まる。(7月)	昭和36	航空自衛隊、小松に駐留。
1963	昭和38	法文学部新校舎完成。(5月)	昭和38	三八豪雪。
1964	昭和39	理学部・教養部合同校舎完成。理学部の仙石町旧四高敷地(現、中央公園)より城内への移転完了。(4月)	昭和39	東京オリンピック開催。
1965	昭和40	新附属図書館完成。三十間長屋から蔵書を移転。(3月)	昭和40	ベトナム戦争始まる(～1975)。
1966	昭和41	教育学部新校舎、学生会館完成。(3月) 新本部棟完成。城内整備事業完了。(12月)	昭和43	東大紛争。大学紛争、全国に波及。
1969	昭和44	自衛隊機墜落事件及び「大学立法」問題を契機に「金大紛争」始まる。教養部・法文学部等で断続的にストライキ突入。(7月)(1970年にほぼ終息)	昭和44	自衛隊機、金沢の市街地に墜落。(2月)「大学の運営に関する臨時措置法」(いわゆる「大学立法」)成立。
1976	昭和51	評議会に「将来計画検討委員会」設置。(10月)		
1977	昭和52	将来計画検討委員会に「キャンパス問題に関する専門委員会」設置。(7月)	昭和48	オイルショック。
1978	昭和53	評議会において「総合移転を目途とする」ことを決定。(12月)		
1979	昭和54	石川県知事及び金沢市長から、移転候補地として「①三小牛・内川地区、②金川地区、③角間・奥卯辰地区、④神谷内・月浦地区」の4地区提示。(3月) 臨時評議会において総合移転を決定。候補地を三小牛地区、金川地区、角間地区に選定。(7月) 第5代金子曾政新学長、将来計画検討委員会にて移転後も城内に教養部を残す「教養の森」構想を発表。(9月) 総合移転の実施計画等を審議するため、将来計画検討委員会に「総合移転実施特別委員会」を設置。(12月)	昭和54	初めての全国共通テスト(共通一次試験)実施。
1980	昭和55	法文学部の分離改組。文学部、法学部、経済学部設置。(4月) 金子学長、文部省の教養部移転の意向を受け、「教養の森」構想を撤回。以後、当面移転しないとする教養部問題が評議会の焦点となる。(7月) 評議会、移転先を角間地区に決定。(11月)		
1981	昭和56	臨時評議会、総合移転を多数決で決定し、用地取得費が概算要求に盛り込まれる。(5月)		
1984	昭和59	総合移転整備事業起工式を角間の移転用地で挙。 (10月)		
1989	平成元	文学部、法学部、経済学部及び附属図書館が角間新キャンパスに移転(総合移転第I期計画事業の始まり)。(7～9月) 資料館オープン。(10月)	平成元 平成2	ベルリンの壁崩壊。冷戦終結。 東西ドイツ統一。
1992	平成4	教養部会、総合移転問題調査委員会の報告書及び「総合移転」問題に関する教養部会声明」を了承し、教養部の総合移転反対運動終結。(4月) 理学部及び教育学部、角間キャンパスへ移転。(7～9月)	平成3	大学設置基準改正(大学設置基準の大綱化)。湾岸戦争。ソビエト連邦崩壊。
1993	平成5	一般教養課程・専門課程の区分を廃止。(4月) 教養部、角間新キャンパスに移転。(7～9月)		
1994	平成6	教養的科目と専門科目をくさび型に配達する4年一貫型の新カリキュラムがスタート。(4月)		
1995	平成7	大学本部、角間新キャンパスに移転。総合移転第I期計画事業完了。(2月)		
1996	平成8	金沢大学改組。教養部を廃止し、教養教育機構(現:共通教育機構)を設置。各学部の学科・講座等を再編。外国語教育研究センター等設置。(4月)		
1997	平成9	大学院自然科学研究科を5年制の区分制大学院(博士前期課程2年、博士後期課程3年)に改組。(4月)		
1998	平成10	総合移転第II期計画事業起工式を挙。 (4月)	平成10	大学審、「21世紀の大学像」を答申。
1999	平成11	金沢大学創立五〇周年記念式典を開催。(5月)	平成12	文部省、国立大学の独立行政法人化方針を表明。
2004	平成16	国立大学法人金沢大学発足。(4月) 宝町キャンパスから薬学部、小立野キャンパスから工学部の一部が、角間キャンパス自然科学研究科棟に移転。(8～9月)	平成13 平成15	ニューヨークで同時多発テロ。 イラク戦争。国立大学法人法成立。
2005	平成17	旧白峰村の古民家を角間に移築した、創立五〇周年記念館「角間の里」オープン。(4月) 工学部の大半が、角間キャンパス自然科学研究科棟に移転。総合移転第II期計画事業完了。(8～9月)		
2006	平成18	教養的科目を共通教育科目に改めた新カリキュラムスタート。(4月)		
2008	平成20	8学部を3学域16学類に再編・統合。(4月)		

I 城内キャンパス今昔



東西は石川門から尾山神社前まで、南北は旧県庁脇のいもり堀から白鳥路前の大手堀まで。敷地面積28.5ha、東京ドームに換算して6.1個分。市役所にほど近い市の中心部に位置しながら、550種もの植物が確認され、中でも南部の本丸付近は鬱蒼たる森の景観を呈する。また、その豊かな緑を拠り所として、1500種を超える動物が生息していると考えられている。園内の建築物は国の重要文化財の指定を受けている石川門・三十間長屋をはじめとして、復元された菱櫓や五十間長屋などが立ち並び、鉛板葺きの屋根が薄く雪化粧を施したかのような白灰色の輝きを帯びて白壁に映え、壮麗な姿を誇る――。

現在の金沢城公園を観光案内風に紹介すると、このようになるだろうか。

冬には雪が、夏には深緑が美しい
この史跡に、かつて大学があった。



城内キャンパス 極楽橋の向こうに二の丸跡を見る (1994.8、個人蔵)
画面奥に見える建物は文法経棟。



金沢城公園 春の石川門 (2009.4)



城内キャンパス 春の石川門 (1971)
『学生便覧 1972年版』(金沢大学附属図書館蔵)



金沢城公園
極楽橋の向こうに二の丸広場を見る (2009.4)

金沢大学丸の内キャンパス。現在のメインキャンパス・角間への移転に至るまで、医学部・薬学部・工学部以外の全学部を擁するメインキャンパスだった。置かれたのは新制大学発足当時には本部・一般教養部など一部だったが、移転直前には理・文・法・経済・教育・教養部の5学部1部局に達し、多くの学生や教職員が闊歩していた。学生たちはキャンパスを「城内」と呼びならわし、登校を「登城」と称する風流人もいたという。香林坊や片町を指呼の間に望みながら、巨樹が悠々と枝葉を伸ばし、カラスやネコのみならず、タヌキまで出没するのどかさ。

しかし、その敷地は史跡であるがために使用できる場所が少なく、新施設の建築もままならず、大学が高等教育・研究機関としての内実を充実させていくに従い、その不便さを露呈するに至った。そして、1977(昭和52)年に「キャンパス問題に関する専門委員会」が置かれ、新キャンパスへの移転事業が進められることになる。



城内キャンパス いもり 宮守坂脇の散歩道 (1989)

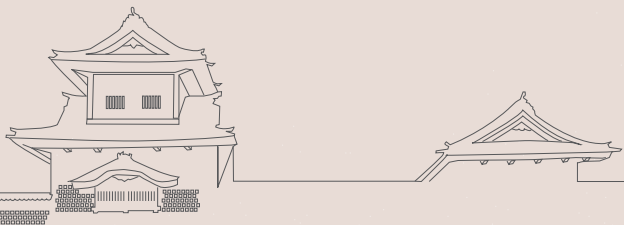


城内キャンパス 旧学生会館横の桜並木 (1989)
画面右の建物は、手前が学生会館別館、奥が学生会館。撮影者の背後が石川門側。



金沢城公園 旧学生会館横の桜並木 (2009.4)
画面奥が石川門の方向。撮影の向きが違うが、画面左の桜並木は1989年と同じものである。

II 新制金沢大学発足～お城の中の総合大学



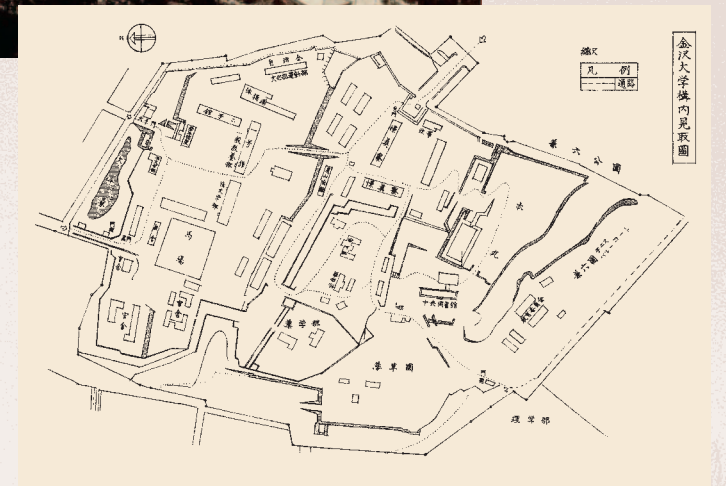
金沢の地は、戦前から金沢医科大学、第四高等学校、金沢高等工業学校、石川師範学校等の高等教育機関が設置され、北陸随一の学都であった。しかし、北陸地区に帝国大学はなく、石川県では明治末期から熱心な誘致運動が続けられていた。戦後も「北陸総合大学」設置運動がすぐに動き出し、敗戦の年の12月には知事が文部省に陳情、翌1946（昭和21）年には期成同盟会ができた。

47年、GHQの石川軍政隊が接収した金沢城跡（旧陸軍第九師団本部及び第七連隊駐屯地）の跡地利用の話が浮上した。石川軍政隊には、軍都から文化都市への転換を象徴すべく大学用地に、との跡地構想があったが、提案は複数存在した。石川軍政隊は、諸提案のヒアリングをCI&E（民間情報教育局）のイールズ高等教育顧問に要請し、ヒアリングを行ったイールズは「北陸総合大学」案が最も妥当と結論づけた。これを受けて石川軍政隊は、同年12月、その設置を条件に金沢城跡を返還すると石川県に通知した。

一方、戦後教育改革の一環として、高等教育の制度改革が行われようとしていた。当初、官立総合大学を7帝大に北陸（金沢）・中国・四国の新設3大学を加えた10とし、その他高等教育機関は地方委譲という計画だった。先のイールズの結論はこれに関連するもので、石川県の長年の悲願は達成されるかにみえた。しかし、これには批判が相次ぎ、CI&Eと文部省は方針転換し、各県に1つの新制国立大学設置を決める。これにより、高等教育ヒエラルキーの頂点に立つ帝国大学はなくなることとなった。なお、「北陸大学」から「金沢大学」への名称変更は、この動向と関連してなされたものである。



木造建築時代の城内キャンパス



金沢大学構内見取図
【学生便覧 昭和25年度版】（金沢大学附属図書館蔵）

49年4月、文部省から設置認可が下り、同年5月31日の「国立学校設置法」の公布により、上記高等教育機関を合併した新制金沢大学が発足した。ただし、当初城内にあったのは本部、一般教養部などごくわずかで、教室も旧兵舎を改装したものだった。医・薬・工以外の学部は城内移転の完了は、開学15年後の64年、城内校舎等の新設がすべて完成したのは、開学17年後の66年のことである。

授業の思い出

私が金沢大学法文学部に入学した1955（昭和30）年は、内灘闘争が終焉し（1953年）、60年安保闘争が本格化するまでの端境期で学内は平静が保たれていた。

一般教養部校舎は、大手門を入ったすぐ左にあり、運動場を挟んで法文学部校舎と相対していた。一般教養課程の授業は、我々の場合は、法文学部・理学部の教官が担当された。

英語科目の教官は、最初の授業の冒頭で必ず「君たちの受験英語を叩き潰す」ことを宣言されるのだが、授業は英文和訳で高校時代の授業と大差ないように思えた。

ただ、授業中に喫煙を許可し、ご自分も両切りタバコ「ひかり

を啜る講義をされたO教官には心底驚いた。また、フランス語のM教官は、試験に際してのみ、気分が落ち着くからといわれ喫煙を許可された。両方とも、だれも喫煙するものはいなかったが、既成概念を超えた教官の行動に驚くとともに、我々を大人として対応されるこれが大学なのだという思いを強く抱いた。

春本繁男（昭和34年法文学部卒業）

お城の中の大学

1958（昭和33）年入学。入学式には、胸を張って、石川門をくぐった。折りしも桜花爛漫。「ようし、学問しよう」と思った。旧陸軍第九師団の木造兵舎が、学び舎であった。廊下も板張りのため、下駄は禁止。高下駄で通学していた私は、教授とすれ違う時は、裸足になり、下駄を持ち、目礼をして、すれ違った。一般教養課程の教授は、旧制四高の教授が多く、興味深い講義が多かった。

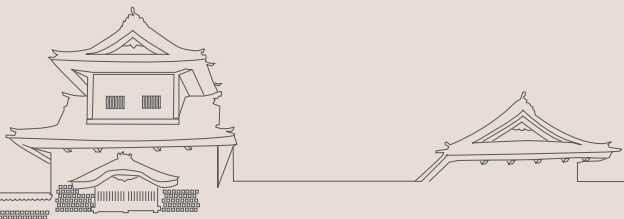
専門課程の哲学科社会学は、学生が少く、4～5人以下で受ける講義がほとんどであった。雪の朝など溜り場の研究室には、達磨ストーブの上の葉缶が湯気を立てていた。早く来た者がお

茶を淹れ、皆んなに配った。しばらくすると先生が来られ、ストーブを囲んで歓談。そのまゝ、講義になったりした。そんな時は大学生を感じたものである。時には、先生の自宅で、コーヒーを飲みながら、難解なドイツ語による原書講読をした。みんな、涙の出る程懐しい。嬉しいことは、北沢寮と馬術部の4年間である。馬術部に伝わる「延魚杯馬術大会」は、今年第48回を終えた。馬術部との係わりは、実に半世紀を超えた。

金沢大学に学んだことを心から誇りに思っておる此の頃である。

藤村延魚（昭和37年法文学部卒業）

Ⅲ キャンパス移転 ～その歴史と背景



学内で城内キャンパスからの移転が最初に話題に上ったのは、1974（昭和49）年である。当時は高度経済成長期で、学生数は増加し、法文学部の分離改組などの整備・拡充計画の実現性も高かったため、城内の狭さと史跡としての制約が問題となったのである。一方、かねてより城内キャンパスの一般開放を要求していた石川県・金沢市・地元政財界は、移転の話題に即座に反応し、学内議論が煮詰まるより先に移転応援の姿勢を明確にした。このような状況下で議論が積み重ねられ、「総合移転」の方針が決定したのは、78年末であった。ただ、この段階の「総合移転」には、移転を考えていない教養部は含まれていなかった。

さっそく当時の豊田学長は、県・市に移転候補地のあっせんを依頼し、4候補地が提示された。これを3候補地に絞り込んだうえで、文部省との折衝が始まったが、文部省は教養部の城内残留を認めなかった。それでも、79年秋、新任の金子学長は城内に教養部を残す「教養の森」構想を発表する。しかし、文部省の了解は得られず、「教養の森」構想は撤回された。文部省は概算要求の腹を固め、大学は最終候補地に角間を決定するが、依然、教養部の移転了解は得られず、概算要求はいったん見送られた。



移転候補地の現在 - 神谷内・月浦地区（2009.9）
山側環状道路から建設中の神谷内 IC を望む。



移転候補地の現在 - 三小牛地区 A（2009.9）
陸上自衛隊三小牛山演習場となっている。



移転候補地の現在 - 金川地区 B（2009.9）
画面左に見えるのは北陸大学。

学生が消えた？

金沢大学の学生は金沢市のどのあたりに住んでいるか、関係学部（文・法・経、教、理）の交通計画委員と事務方を煩わせて、分布状況を地図に落としもらったことがある。バス路線、ダイヤ編成について北陸鉄道と交渉する、その基礎資料とするためである。教養部が丸の内（城内）にあったこともあり、移転を済ませていた文・法・経では浅野川左岸（小將町～旭町）にドットが集まっていた。

教養部の移転、大型ショッピングセンターの開業で学生は山（小立野）を下り、川を渡って、「大学門前町」に移住した。学生の半数は2km圏内に居住し、その3分の1が徒歩で通学している、というのは1980（昭和55）年の通学実態調査報告であるが、現状説明かと間違えう。

金沢市内から学生が姿を消して久しい。金沢が大学都市らしくなるのは入学式と卒業式の日くらいである。学生を市内に呼び戻す試みもなされているが、市中での授業は「里人」には交通費がかかる。金沢が「学部」として若者をひきつけるためには、若者・学生が住める町でなければならない。高速道路の無料化に税金を投ずるより、低廉な公共交通を整備するほうがよほど地域の振興に役立つはずだ。

前田達男

（金沢大学名誉教授、元金沢大学総合移転実施特別委員会委員）

とはいえ、それまでの文部省・県・市等との関係から、大学に移転以外の道は残されておらず、81年5月、評議会は概算要求を異例の多数決で決定する。こうして角間移転は動き出し、84年に起工式が行われ、89年夏、文・法・経済学部と附属図書館の城内からの移転で、第Ⅰ期移転が始まる。

この間、教養部は移転に反対したままだったが、新教養部校舎（現、総合教育棟）の完成が見えてきた92年4月、部内調査委員会の報告書と声明を了承し、移転反対運動に終止符をうち、翌年夏に移転した。そして94年夏の本部移転で城内から角間への移転が完了した。

その後、98年から第Ⅱ期工事が始まり、2005年に小立野キャンパスから工学部が完全移転して、角間キャンパスへの移転事業が完了した。移転論議が起こってから31年、移転工事の開始から21年、移転開始からでも16年の月日がかかったのである。



気になる「大学の自治」

標準的な憲法学のテキストによれば、「学問の自主性の要請は、とくに大学について、『大学の自治』を認めることになる。……大学の部内の行政に関しては大学の自主的な決定に任せ、大学内の問題に外部勢力が干渉することを排除しようとするものである。」（芦部信喜『憲法』第4版・2007年・岩波書店）

金沢大学の城内から角間へのキャンパス移転及び教養部廃止をめぐる問題の本質は、まさしく「大学の自治」の根幹を問うものであった。この問題をめぐって、教養部会（教授会）は「キャンパス移転」にも「教養部廃止」にも反対し続けた。

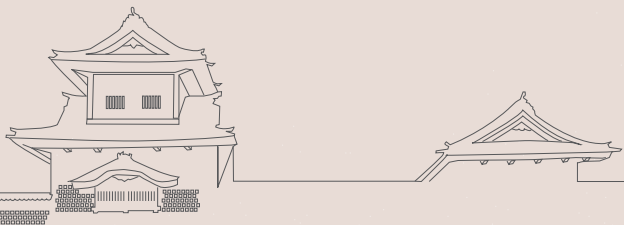
しかし、長期にわたる闘争の末に教授会の意見は二分した。

当時、教養部長職にあった私は、票決による決定を断念し、私の判断に委ねて頂きたいと提案して了承を得た。眠れない夜が続いた。結局のところ、「キャンパス移転」と「教養部廃止」を選択せざるを得なかった。

今日、キャンパス内で「大学の自治」をめぐる議論は皆無である。大学は、文部科学省の「指導」の下に、というよりはそれを先取りした形で動いていると言って過言でない。停年まであと1年半、「大学の自治」の行方が気になる昨今である。

畑 安次（大学院法務研究科教授）

IV 金大生の生活 ～授業・サークル・放課後



丸の内キャンパスに通う多くの学生は、そのキャンパスを「城内」と愛称し、歴史ある緑豊かな研究環境のもと、自由闊達に4年間を過ごした。門を通過して、決して広いとは言えない学内道路を進んで行くと、たくさんの自転車や原付バイクとすれ違い、徒歩で通う大勢の学生が行き交う……そんな光景が今も目に浮かぶ卒業生は少なくなかろう。

「石川門」という関門を突破した新入生にとって、個性的な教授陣による高度で専門的かつ独創的な講義やゼミが並ぶ、大学のカリキュラムは衝撃的だった。やがて彼ら彼女らは本当の「学ぶことの意味」を知ることになる。研究室で夜が明けるまで、教員や仲間と議論し、その若い4年の日々を学問探究に投じることで各々の将来の夢は大きく成長し、そして卒業の日——「城内」と別れ、旅立って行った。



文化部部长室 通称「文サ連」(石川県立歴史博物館蔵)



金大祭で香林坊を練り歩く

城内で過ごすということ

1983(昭和58)年の春、満開の桜に囲まれた石川門をめぐり大学生として初めて金沢城に登城しました。

朝夕に片町香林坊の繁華街を通り、寮から城内の理学部へ通う毎日でした。中央公園を抜けた後、宮守坂から城内に入り、三十間長屋を右に一瞥した後生協本部と学食の間を通り教養部裏へと階段を降ります。城内には歴史を感じさせる建物が多く残っており、自分もまた歴史の中にいるような思いがしたものです。

寮での生活が落ち着く頃には近江町に寄って晩飯の食材を買うのが日課になりました。その後院生になると風呂は近くの銭湯で

賄い、雷の季節には大学に待機して停電に備え、雪がつもれば黒門付近で立ち往生した車の救助に出動です。金沢市の中央にあって、金沢城はいつしか私たち院生の「根城」となりました。

その後紆余曲折の後、1992(平成4)年に再度金沢大学の学生となりましたが、その夏に理学部は角間に移転し城内での生活は終わりました。

奥寺 浩樹

(理工学研究域自然システム学系准教授、昭和62年理学部卒業)

講義やゼミの合間には、寸暇を惜しむように、近隣の武蔵が辻、近江町市場、香林坊の映画館街、さらには片町へと気の合う友人と繰り出して、街歩きを楽しんだ。放課後や休みの日になれば、部活やサークルで汗を流し、仲間の歓声や涙に包まれた。アルバイトに励んだことも思い出の一つ。目を皿のようにして、アルバイトセンターの求人情報を見つめ、家庭教師や販売業務、配達手伝いや肉体労働など、さまざまな仕事にチャレンジした。数々の出会いがあり、精神的に大きく成長できる機会を得た。

たくさんの仲間たちとの邂逅、語り、別れ……。高度経済成長やバブル経済など時代の流れに翻弄されながらも、若者たちが青春を謳歌していた様子が、写真からも伝わってくる。金大生が「城内」で過ごした年月は約45年間。その間、社会情勢・経済事情の劇的な変化や学内のさまざまな論争があった。しかし、彼ら彼女らのライフ・スタイルは、先輩から後輩に受け継がれたよき伝統に守られ、さほど変わらなかったのかもしれない。

城内で学んだこと

私は教育学部中学校教員養成課程(数学科)に入学した。この課程は、各教科5名程度、全体約50名で授業、実習、課外活動に参加する機会に恵まれた。様々な専門分野を修める級友との交流を通して、各専門分野の特色と価値を垣間見ることができた。課題解決に必要な複合的・学際的・創発的な視野を持ち得たとすれば、旧城内での学びの環境のおかげであると思う。

現在の教育では「生きる力」を育むことが重視されている。現実には、辛いところを自分で強く努力をする機会を設けるよりも、掻いてあげるような教育が散見される。城内の頃は、数学が分

からなくとも、至れり尽くせりの指導を受けた経験はなかった。むしろ、推測を立て反例に論駁され、さらに推測を改良しながら数学を創っていく真正な活動を通して、自ら考える機会を与えていただいたように思う。特に、恩師久志本教授から、人間の活動としての数学の一端を体験でき、数学教育学を専門にする重要な契機となった。

大谷 実

(人間社会研究域学校教育系教授、昭和52年教育学部卒業)

金沢城内での思い出

泉野の下宿からダブル坂を降り、犀川を渡り、本多町を抜け、兼六園の坂を登り、石川門をめぐり、教養部、その隣の理学部、時には本丸の文学部へ通う4年間でした。屋星がこよなく愛した四季折々の美しい川、伝統に育まれた街のお城の中の大学に憧れ、全く見ず知らずの地で学んだ4年間、多くの友と時間を共有し、将来の夢を語り、未熟ながら自己の確立に向けた時期でもありました。

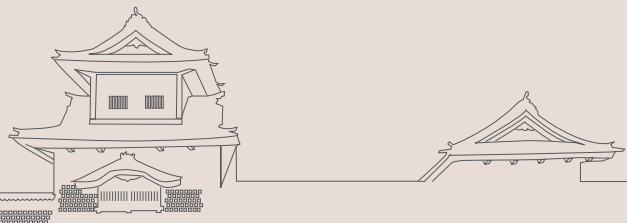
お城の中での最も強い思い出は私を合唱団に誘い音楽の世界に引き入れた友人、山本庸夫君の存在です。彼は小さいときから天性のテノールで、時に城内で、時に下宿や旅の空で夢を語り、

彼は夢を求めて3年生の春、日本航空のパイロットを目指し故郷、金沢を旅たちました。その後も度々、再会し、互いの夢を確認しながら生涯の友となるはずでした。

1971(昭和46)年、6月14日、インドニューデリーの郊外で日航国際線の副操縦士として墜落し、落命してしまった。十一屋の彼の墓前と城内の大学、クラブの部室と犀川の堤は私の青春でした。早すでに40年です。

田中 隆治(金沢大学理事、昭和44年理学部卒業)

V 再発見、金沢城の歴史



かつて金沢大学丸の内キャンパスがあった金沢城跡の地は、大学移転後の1995（平成7）年、国から県に移譲された。翌年より石川県は金沢城址公園として整備を開始（2001年金沢城公園と改称）、二ノ丸には菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓が120年ぶりに復元された。復元作業は今も続いており、現在は河北門の復元と石川門の修復が着工中である。また県に金沢城研究調査所が開設され、発掘調査・研究を行い、その成果を発表している。ここでは、それらの成果を基にあらためて金沢城の歴史に目を向けてみたい。

小立野台地の突端部に位置する山城としての歴史は古い。その草創は1546（天文15）年、加賀一向一揆による金沢御堂の建立にある。守護家であった富樫氏が影響力を失うなか、約100年間にわたり「百姓ノ持チタル国」の拠点としてその信仰・軍事の中樞をなした。周囲には寺内町が形成され、金沢が都市化する契機となった。その後、本願寺と織田信長が対決、1580（天正8）年御堂は織田方柴田勝家勢に攻められて陥落、開城した。

「金沢城」としての嚆矢は、信長による家臣佐久間盛政の配置である。御堂落去の戦功により、初の“金沢城主”となった。それもつかの間、1582年本能寺の変が起こる。その後秀吉の世となり、金沢城入城を果たしたのは前田利家であった。以後、本格的な築城が始まる。加賀藩主前田家は子々孫々13代に亘り、金沢城主としてその整備に努めた。金沢城は1602（慶長7）年の天守閣焼失後もしばしば火災・震災の被害を受けており、1631（寛永8）年以降は藩主の居域を本丸から二ノ丸に移し、幕末を迎えた。

明治維新後、廃藩置県により、金沢城は国の所管となる。1871（明治4）年兵部省（翌年陸軍省）の所管となり、1875年には歩兵第七連隊が置かれた。藩政期の建物は残されていたが、1881年二ノ丸跡兵舎からの出火により、石川門と三十間長屋・鶴倉倉庫を残して、ほとんどを焼失した。1898年には、陸軍第九師団司令部が金沢城跡に置かれ、第二次世界大戦が終わるまで存続した。大戦後、金沢城跡はGHQに接收されたが、その後返還され、金沢大学が創設されたことは、先に述べたとおりである。



『儀式風俗図絵』巖如春画（1933、金沢大学附属図書館蔵）
元日に金沢城へ登城する光景を描く。



明治初年の鼠多門（金沢大学附属図書館蔵）

おおよそ120年の時を経て、金沢城は今再び江戸時代の姿に戻りつつあり、また国の史跡ともなった。1995年に金沢大学が金沢城を去って14年。城内には、ここに金沢大学があったことを偲ばせてくれるような痕跡はほとんどなくなってしまった。私たち金沢大学に関わる者の移転への様々な想いをよそに、金沢城は確実に新時代を迎えている。私たちも、角間の地に移った時から金沢大学が“新時代”を迎えたことをしっかり認識する必要があるだろう。大学が経た“時代の記憶”を大切にしながらも、誰からも思い起こしてもらえそうな素晴らしい大学を、この角間の地に築き上げるよう努力することが、いまの私たちに求められていることなのかもしれない。



本丸跡にあった石造遺物（塔身）（1968.8、個人蔵）

陸軍と金沢城

【金沢城ど軍都】金沢

「城下町金沢」のシンボル金沢城は、維新以降、廃藩置県をへて、1872（明治5）年2月陸軍省の所管となる。度重なる小火に加え、不要な櫓や門扉が順次破壊されていくなか、1881年1月10日、旧二ノ丸御殿より出火。藩政期の建物は石川門などを除いてほぼ焼失してしまう。この間、近世城郭を構成する建造物が、近代的な軍隊施設に取って代わられるありさまは、金沢城のイメージを大きく変貌させるものであった。さらに、1875年には歩兵第七連隊が、98年には陸軍第九師団の司令部が置かれ、金沢城は「軍都」のシンボルとなっていく。ちなみに、軍隊時代の建物としては、現在、第六旅団の司令部が基右衛門坂に残るものの、大学時代まで残存したいくつかの九師団関係施設は、「江戸の景観」に復する公園整備にともない、全て解体されてしまった。



九十間長屋下に並ぶ歩兵第七連隊兵士（1906）
【20世紀の照像】、能登印刷出版部



産業と観光の大博覧会ポスター
『産業と観光の大博覧会誌』
（1934、個人蔵）

【産業と観光の大博覧会】

ところで、九師団時代の管内は、陸軍の所管であったため、当然一般市民の入城は出来なかった。こうしたなか、城内への出入りが開放されたことがある。1932（昭和7）年春の「産業と観光の大博覧会」開催に際してのことであった。同博覧会は、昭和恐慌下の市勢振興を目標に計画されたもので、4～6月にかけての55日間、出品点数約30万点の大博覧会であった。その際、第一会場は出羽町の練兵場、第二会場には旧城本丸跡があてられた。おそらく、軍の特別な配慮があったのであろう。本丸跡には観光館が設けられ、「百万石文化展」も開催されている。また、イモリ堀からは仮設の陸橋が架けられ、辰巳櫓址の四阿では、市民が滅多に見られない、城内からの見晴らしを楽しんだという。博覧会自体は入場者56万余人を得て「大成功」。金沢城も、その盛況に一役買った興味深い事例といえよう。

本康宏史

（石川県立歴史博物館学芸課長・金沢大学資料館客員研究員、昭和55年法文学部卒業）

出品目録

I. 城内キャンパス今昔				
1	金沢大学城内キャンパス航空写真	1978年	1点	
2	城内キャンパス写真（宮村成信氏撮影）	1989年	37点	
3	金沢城公園写真（資料館撮影）	2009年	10点	
4	学生便覧	1950～2009年	58点	金沢大学附属図書館蔵
5	写真パネル		4点	
II. 新制金沢大学発足～お城の中の総合大学				
6	金沢大学創設資料	1948～1950年	5点	
7	第1回石川県教育宝籤	1948年	1点	石川県立歴史博物館蔵
8	金沢大学城内整備計画模型		1点	
9	写真アルバム（第1回入学宣誓式・開学記念式典・第1回卒業式等）	1949～1956年	1点	
10	学生服（工学部）		1点	
11	教官別時間割表	1949、1956、1966、1976年	4点	
12	写真パネル		15点	
III. キャンパス移転～その歴史と背景				
13	金沢大学総合移転候補地現況模型	1981年	1点	金沢大学施設部蔵
14	金沢大学総合移転用地現況模型	1983年	1点	金沢大学施設部蔵
15	金沢大学総合移転基本設計全体模型		1点	
16	将来計画構想	1979、1983年	2点	
17	将来計画評論 縮刷版	1979年	1点	
18	金沢大学「総合移転」の経緯と問題点	1992年	1点	
19	金沢城報 1～5号	1995年	5点	個人蔵
20	創立50周年記念式典・祝賀会 配布資料・記念品	1999年	7点	
21	写真パネル		11点	
IV. 金大生の生活～授業・サークル・放課後				
22	法経（卒業記念文集）	1954、1959、1969、1979年	4点	
23	卒業アルバム	1983、1986、1992年	3点	
24	卒業生諸君に寄す	1981、1984、1985年	3点	
25	惜別贈卒業生	1986、1987年	2点	
26	課外活動案内	1968、1971～73、1994年	5点	
27	学生部時報（創刊号、第2号）	1954、1955年	2点	
28	教養部の歩み No.2	1970年	1点	
29	写真パネル		14点	
V. 再発見、金沢城の歴史				
30	慶長金沢御城古図（有沢図系・写）		1巻	金沢大学附属図書館蔵
31	金沢城古図		1巻	金沢大学附属図書館蔵
32	金沢城二の丸絵図		1巻	金沢大学附属図書館蔵
33	儀式風俗図絵 巖如春画（パネル）	1933年	1点	金沢大学附属図書館蔵
34	加賀藩年中行事図絵 巖如春画（パネル）	1932年	6点	金沢大学附属図書館蔵
35	石造遺物（塔身）	14世紀	1点	
36	金沢城古写真	1868年	5点	金沢大学附属図書館蔵
37	明治期の百間掘 写真		1点	石川県立歴史博物館蔵
38	絵葉書「北陸野外大飛行實況」（金沢城）		1枚	石川県立歴史博物館蔵
39	絵葉書「金沢市空中寫眞（石川縣）」		1枚	石川県立歴史博物館蔵
40	金沢城旧城郭内各部隊配置図		1巻	金沢大学附属図書館蔵
41	金沢市主催「産業と観光の大博覧会」絵葉書	1934年	27枚	石川県立歴史博物館蔵
42	『産業と観光の大博覧会誌』	1934年	1冊	個人蔵
43	出羽町練兵場会場六百分ノ一（図面）		1枚	石川県立歴史博物館蔵
44	金沢城内 歩兵第七聯隊旧建物写真	1987年	4点	石川県立歴史博物館蔵
45	黒漆塗紺糸威二枚胴具足		1領	
46	九師団凱旋と軍事教練（昭和7年）・産業と観光の大博覧会（昭和7年） フィルム映像ビデオ		1本	石川県立歴史博物館蔵

※展示点数については多少の変更があります。

協力者・協力機関（50音順・敬称略）

遍プロジェクト
 石川県立歴史博物館
 石川県金沢城・兼六園管理事務所
 北國新聞社
 毎日新聞社
 前田土佐守家資料館
 酒井誠一
 西谷公作
 野村洋子
 橋本哲哉
 宮村成信

〈コラム執筆〉

大谷 実
 奥寺浩樹
 田中隆治
 畑 安次
 春木繁男
 藤村延魚
 前田達男
 本康宏史

主要参考文献

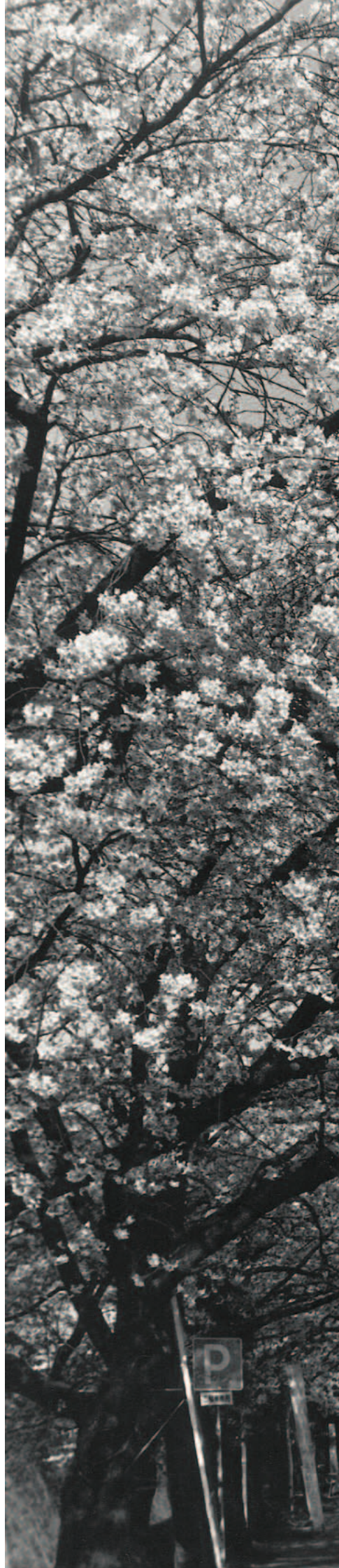
- ・石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室編『よみがえる金沢城①—四五〇年の歴史を歩む—』北國新聞社、2006
- ・石川県金沢城調査研究所編『よみがえる金沢城②—今に残る魅力をさぐる—』北國新聞社、2009
- ・石川県金沢城調査研究所編『金沢城史料叢書 6 絵図でみる金沢城』2008
- ・石川県金沢城調査研究所編『研究紀要 金沢城研究』創刊号～第6号、2003～2008
- ・井上鋭夫著『金沢城址の発掘』金沢大学金沢城学術調査委員会、1969
- ・金沢市史編さん委員会編『金沢市史』通史編 1・2、資料編 3～8・13 金沢市、1996～2005
- ・金沢大学金沢城学術調査委員会内「金沢城」編集委員編『金澤城 その自然と歴史』金沢大学、1967
- ・『金沢大学十年史』金沢大学、1960
- ・金沢大学50年史編纂委員会編集『金沢大学五十年史』通史編・部局編、金沢大学創立50周年記念事業後援会、1999～2001
- ・金沢大学創立50周年記念事業後援会写真集編集委員会編『金沢大学写真で見る50年』金沢大学創立50周年記念事業後援会、1999
- ・金沢大学法文学部内日本海文化研究室編『金沢城郭史料』石川県図書館協会、1976
- ・金沢御堂・金沢城調査委員会編『金沢城跡』石川県教育委員会、1993
- ・喜内敏編『日本城郭史研究叢書 5 金沢城と前田氏領内の諸城』名著出版、1985
- ・『石川県史』第2編・第3編石川県、1928～1929
- ・『激動の地方史』制作委員会編『激動の地方史』北陸放送株式会社、1992
- ・本康宏史監修『20世紀の照像 石川写真百年・追想の図譜 改訂版』能登印刷出版部、2003
- ・本康宏史著『軍都の慰霊空間—国民統合と戦死者たち—』吉川弘文館、2002

（五十音順）

本特別展では、総務省 SCOPE 地域 ICT 振興型研究開発に係る研究開発「ユニバーサルな知識表現による地域歴史観光 ICT の研究開発」（2008-2009、代表：北陸先端科学技術大学院大学 堀井洋）の一環として、遍プロジェクトが開発した「歴史資料活用プラットフォーム KuKuRi」を用いて、展示資料の一部を公開いたしました。



金沢大学に関する思い出の品をお持ちの方は、ぜひ当館へご寄贈ください。寄贈していただいた品物は、貴重な歴史資料として永く保存・活用させていただきます。



彰^{SHOU} 往^{OU} 察^{SATSU} 来^{RAI}

— 20年目の角間キャンパスから城内を想う —

編集・発行：金沢大学資料館

発行日：平成21年10月15日

印刷：能登印刷株式会社